

随想

生きがいについて

仕事とは与える側と受け取る側が協調し達成してゆくもの

(株)PPQC研究所 加藤 宏光

生きがいについて考えていると、いろんな資料が気になってくる。平成二十九年五月二十一日(日)の東京新聞・朝刊の五面に《時代を読む》というコラムがあった(貴戸理恵・関西学院大准教授)。略意を引用してみよう。企業の『働き方改革』が進められている。長時間労働が過労死・自殺の大きな要因で、残業できない働き手を締め出す傾向があったことから、残業時間が減るのは望ましい傾向。一方、長時間労働は一見して『強制』とわかるものばかりでなく、『働く側が望んだ(かのように見える)長時間労働』がある。ここでは若者が陥りやすい『働き過ぎ』について考える。

『自己実現系ワーカホリック』と呼ぶ(搾取される若者たち)バイク便ライダーは診た! 若い働き手には『独り身』で融通が利き、体力があつて『夢中になれる何か』を求める人がいる。そんな人が『バイクが好きだから』とバイク便ライダーになると、不安定な請負契約下で肉体的にハードでも没頭し、行き詰まる姿を描いている(らしい)。『好きを仕事に』という趣味性以外に《頑張れば売り上げが上がる》というゲーム性・お客様・患者様のために《という奉仕性・最高の仲間に感謝》というサークル性やカルト性が『自己実現系ワーカホリック』

を生み出すトリック(きしむ社会)と社会学者の本田由紀氏はいう(らしい)。『本人が好きならいいのでは?』と思う向きもあるだろうが、重要なのは、やりがいが強調される職場はたいがい給与・雇用の保証が十分でなく、それをメンタルな報酬で補っている点である。長期戦の人生では健康の問題や熱が冷めた時に、安定した職場なら職場との距離を取って働き続けることができるが、不安定な職場だとうまく方向展開しないと生活が厳しくなってしまう。背後に雇用の柔軟化という市場の要請に応えながら、正社員と非正規社員の断絶を保持し続ける雇用構造の問題があるからだ。それを踏まえて

個々の若者にどう働き掛ければいいのか? (貴戸氏は)先日、大学の学生に『バイトは塾講師でやりがいがあり、サービス残業も楽しんでる。これは悪いことか?』と言われた。答えとして『やりがいと給料は別、同じことをフリーターの塾講師ができるのか? サービス残業が常態化した場合の弊害を考えるべき』というものであつた。そして、貴戸氏は《働き手としての権利感覚をきちんと持つこと、やりがいは大事だが不当なことを受ける必要はない。働き手としての自分を尊重し職場に仲間を得る土台を作る。そのために、『職場の価値がすべて』と結んでいる。

彼女のこの説は、ポイントを押さえているようでありながら、何となく耳障りが悪い。著者も、大学の研究室生活以来今日まで、仕事にやりがいを求めてきた。仕事が生ともいえるこれまでの人生では《生きがいは仕事のやりがい》である。やりがいを見つけれない仕事の中で、やりがいをどのように見つけて没頭できるかが人生を充実させるための方法の一つである、と信じている。氏の考え方に同調できないのは、《仕事は与えられるもの、働くモノは働かされ搾取されるモノ》と強調しているかのように感じられてならないからである。

そこに時間で縛られた感覚がいまいになることは否めない。著者が学生であつたとき、新しく接した《病理学》に触れていること、自分の疑問が解けることが楽しくて、ラボを後にするのが午後八時半・九時であり、そこから自宅まで電車やバスを乗り継いで二時間半。毎日最終バスで帰ると午前〇時前であつたが、何も不満を感じなかつた(もちろん土曜日も日曜日も祭日もない)。以前紹介した家禽試験場へ奉職した際に、毎朝車で自発的に上司を迎えにご自宅へ出向き、七時過ぎに仕事を終えてまた上司を送つてから帰宅しても九時前には帰着でき、日曜日が休日(必要なら無給で出勤していたが)。それで給料がもらえる。社会人とは楽な立場だな!と感じたものであつた。

計画が狂うことは往々にしてあつた。今の社会で、労働に対する報酬が十分でないと感じる人は多いであろう。報酬は多ければ多いに越したことはない。しかし、著者が感じるには《気に染まない業務をしなければならぬなら、それに見合う報酬を...》というのが報酬への不満《ではないのだろうか? 先の事例で、塾アルバイトをしている学生がそこに生きがいを感じ、サービス残業さえ楽しいとしたら、著者ならたしなめることは決してしない。その学生の幸せ感をどうして損なうことができよう。

一面(論点スペシャル)に先生(小中学校教諭)の働き方改革どうすれば、という意見論述があつた。《教師の労働環境が劣悪である》という報道は近年多い。さまざま業務が私生活の時間までを奪う。ストレスで心身を損なう先生も少なくない、といった報道で、先生方の労働環境が悪いことは理解できるが、著者の世代からすれば、小中学校教諭という聖職が労働という言葉で無造作にその他と束ねられる現在社会の在り方にこそ問題があると感じられてならない。

著者は、《仕事とは与える側と受け取る側が協調しながら達成してゆくもの》と理解している。生きがいを仕事に感じている人の業務に対する姿勢は、そうでない人々とは根本的に異なる。サービス残業を全部肯定することとはできないが、仕事が自分のモノであり、達成感や相手の感謝に自分も喜びを感じるなら、

これらの他人から見れば激務がなんのストレスもなくこなせたのは、業務命令がなく、すべて自分の計画に従つてこなせば良かったからである(もちろん、急な病性鑑定等が飛び込めば、

サービス残業が苦になるとすれば、そこにはもう《幸せ感》や《やりがい、生きがい》が生まれるはずがない。それでも労働を提供する側が苦痛になるほどのサービス残業を強いるとすれば、それは駆逐されるべき《ブラック企業》であり、その対処は労働者の責務ではなく、政治の問題であろう。同じ東京新聞の五月十八日一

生徒が数人、先生を訪ねて宿直室でお茶等を飲みながら先生の話に聞き入つたものであつた。そうした先生への尊敬の念が失われたことこそが、先生の働きがい(生きがい)を奪つてしまつたのではないだろうか? 《生きがいと働きがい》、しっかりと考えたい、深い問題である。